
魔導戦記リリカルなのはStrikerS <交わりし、魔法と魔導の軌跡>

月影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導戦記リリカルなのはStrikers <交わりし、魔法と魔導の軌跡>

【Nコード】

N1929Z

【作者名】

月影

【あらすじ】

悲しき運命に“魔法”の力を持って立ち向かう者が居た。繰り返される悪夢の連鎖、誰にも頼れぬ孤独の戦い。それでもその者は立ち止まらない、全ては友との約束を果たす為に、そして友の為に……

数多の世界の為、“魔導”の力を持って戦う者達が居た。己を磨き、果たすべき任務を果たし、人に害なす人を、存在をねじ伏せる。譲れぬ信念を胸に抱き、力を振るう者達が居た

二つが交わる時、新たな物語は幕を開ける

この作品は前に書いた『リリカルなのはStrikerS』誰が為の剣』のリメイク+大幅な路線変更の作品です。最初はクロス、そして第二部で誰が為の剣のリメイクと言っ予定です

ブローグsideM『友が残した新たな道標』

ぼろぼろに崩れた街、降りしきる雨。まるで大きな災厄が過ぎ去った後かのようにこの場所は静寂に包まれていた。そんな場所に存在する二人の人影があった。黒のロングヘアーをした少女が自分の目の前で横たわるピンクの髪を赤いリボンで結って短めのツインテールにしている少女を見下ろしていた

「なんで、来たの……？」

黒の少女が問うた。静かに、けれどその言葉の奥に確かな怒りと悲しみを交えながら

「えへへへ、ごめんね……」

「あなたの力なんて要らなかった！ アイツだって私一人で……」

それは嘘だった、ついさっきまで自分が一人で戦っていた相手は自分の攻撃なんて諸共しなかった。彼女が参戦したからこそ倒せた相手だ。けれど……

「あいつを倒しても、これじゃ、何も意味がないじゃない……」

けれど、その先にある結末を彼女は知っている。そしてそれは彼女にとって喜ばしい物では決してなかった。むしろそれを避けたいが為に彼女は一人で戦っていたのだ。それこそあらゆる犠牲も辞さない覚悟で……。そして“今回”はほんとに全てを犠牲にした。最初に出会う筈だった先輩も、後にこの町にやって来る筈だった彼女も、少女にとっての一番の親友すらも……。

(それでも、これでもまだダメだと言うの!？　これ以上、何を犠牲にすれば　を救えるのよ!)

自分たちと言う存在を生み出す元凶はどうやっても排除できない。だからこそ、この少女が自分たちと言う存在を知り、そして関る接点となる全てを排除、見捨ててまで彼女を守ろうとしたのにそれでも“また”救えなかった

「判ってる。でも、　ちゃんが一人で戦って傷つくのをどうしても見ていられなかったんだ。それに　」

少女が何か言っている。けれど、その言葉は自分にとって意味は無い。もうすぐ“やり直す為”の準備が完了する。ならばここを捨てて、次に行くだけだ。永遠に終わり無き迷路、道標は一つしかないけれどそれでも自分はやめる訳にはいかない、立ち止まれないから。けれど

「この場所には思い出があったから……」

「思い、出……?」

「うん……　ちゃんと過ごした思い出。でも　　ちゃんは死んじやって、私にはもう思い出しかなかったから……」

「っ!?!?」

その言葉に彼女は声を詰まらせる。その様子にも気づかず、少女は虚ろな目に涙を溜めて言葉を続けた

「でも、この街が無くなったら……思い出すらも消えちゃう気がするの。ちゃんの生きた証が、存在が、本当に消えちゃう気がする……」

少女の言葉に彼女は既に言葉が出なかった。

(なんで、なんで気づかなかったの!? こんなやり方じゃ、ダメだったのにつ!)

仮に今回で少女が生き残っても、少女は真の意味で救われない。その心には深い傷を、悲しみを、絶望が残る。そしてヤツはそれにつけ込んで少女に“契約”を迫るだろう。そしていつか少女はそれに応じる。ヤツのもたらす希望にすぎる。それが絶望に続く希望だとしても

(全てを救わなければいけないかった。でなきゃ、は本当の意味で、救われないのにつ!!)

そして次の瞬間、少女は苦しそうなうめき声を挙げる。何度と無く見てきた光景、何度も迎えた瞬間。

「ねえ、一つだけお願いが……あるんだ」

そう言って、少女は手の平に乗せた何かを差し出した。この後、少女が自分に願う事は知っている。故に彼女はその手にハンドガンを握り、その銃口を“ソレ”に向けた。そして、少女が最後に笑顔になると同時に引き金を引き、“ソレ”を壊した、黒く染まった、少女の魂を……。言葉は途切れ、その場に静寂が戻る。やがて、彼女は少女の傍にしゃがみ込むと

「ごめん、本当にごめんね……今まで、何度もつらい思いをさせて……」

すでに物言わぬ屍とかした少女の手を握り、彼女は涙を流す。それは後悔と悲しみの涙。自分の歩みが間違이었다と悟らされた。そしてその為に自分は何度もこの少女を死なせてしまっていた。やがて、嗚咽が止まると、少女はゆっくりと立ち上がる。涙を拭い、決意に満ちた目で少女を見下ろす

「もう、間違わないから……こんどこそ、あなたを救ってみせる。約束を、果たして見せるから」

少女の最後の言葉、それが彼女の中に新たな道標を示す

「だから、もう少しだけ待ってて」

そして、少女は“魔法”を使う。全ての始まりへと帰る魔法を

プロローグ side M - 2 『幾度目の始まり、変わり始めた大局』

「彼女だけでは荷が重すぎたんだ」

「そんな、あんまりだよ……こんなので、ないよ」

自分が住んでいる街。されど、今それは辺りから煙がたち込める
廃墟と化している。そんな廃墟で、体から血を流し戦い続ける彼女
を、少女はただ見守るしかなかった

「まどか」

そんな少女、鹿目まどかに白い猫に似た動物が声をかける

「運命を変えたいかい？」

「えっ」

「この世の何もかも全て、君が覆してしまえばいい。君にはソレを
可能にする力があるんだから」

遠くでこちらのやり取りに気づいた少女が何か言っている。けれ
ど、まどかには聞こえない。ただ目の前の惨劇を覆せる、その可能
性に心奪われていた

「だからまどか」

そして、その生物は口にする

「僕と契約して魔法少女になってよ」

夢はそこで覚めた

「いいですか？ 今日先生から大事なお話があります」

何時もの教室、何時ものクラスメート、そして何時もの教師、なんてことの無い朝の授業風景。そんな中彼女達の担任、早乙女和子が険しい表情で生徒達を見渡し

「いいですか女子の皆さん！ 卵焼きの焼き加減にケチをつける様な男とは付きあわない様に！ そして男子の皆さんはそんな大人にならない様につー！！」

教壇に手を叩き付けて半ば叫ぶ様に声を出す先生。かと思ったら、その直後「話は以上です……」と今度は涙目でうな垂れる

「あちゃ〜、今回の相手もダメだったのか……」

「だね……」

既に初めてじゃないのか、先生の反応から大よその状況を理解した青のミドルヘアーの少女、美樹さやかは言葉にまどかは苦笑いをしながらも相槌を打つ

「あー、後ついでに転校生を紹介します」

そして次の瞬間にはケロッとした和子が一番大事な筈の話題を口にする。いや、そっちが大事だろ！とクラス一同の心がシンクロした所で、教室のドアが開き黒いロングヘアーに物静かな、いやどこか冷めた雰囲気纏う少女が入ってくる。それはまどかが今朝夢に見た少女と全く同じ姿をしていた

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」

（あの人、夢に出てきた！？）

等と、まどかが驚いていたのも一瞬。自己紹介を終えたかと思うとほむらはまどかの事を凝視、けれどすぐに視線を外すと自分の席に座ってしまった

「ね、ねえ？ あの子、こっちにガン飛ばしてなかった？」

「えっ、そ、そうかな？」

自分と同じ事を思っていたさやかに、誤魔化す様に答えまどかは一限目の準備を始める。ほむらの事を心の何処かで気にしながら

一限目の休み時間、転校生がクラスメートから質問攻めに合うのは殆どお約束みたいなものだ。けれどほむらにとってはそんな事はどうでもいいし、むしろ煩わしいだけ。そう思うほど程に慣れた風景でしかない

「ごめんなさい……ちょっと緊張しちゃったみたいで気分が悪くて、保健室に行かせてもらえるかしら？」

そう言っつて、立ち上がりまどかの傍に向かい、もう何度目となる言葉を吐く

「鹿目さん」

「は、はい」

「あなた保険委員よね。案内してもらえるかしら？」

そして、もう自分にとって歩きなれた通路を歩く。自分が前でもどかが後ろ、これも同じ……いや、最初の2回だけは自分が後ろだったと思いつく

「あ、あの暁美さん……」

「ほむらでいいわ……何？」

「あ、あのねほむらちゃん。私達って前に何処かであった、かな？
……なんちゃって、そんな訳、ないよね」

まどかの言葉に黙り込むほむら。そしてまどかの方は変な事を言
って怪しまれたと思っただのか、うろたえながらもさっきの発言を取
り下げる。それから数秒、無言のまま二人は目を合わせていたがや
がて、ほむらの方から口を開く

「鹿目まどか」

「は、はい!？」

「あなたは家族や、友達のこと。大切だと思ってる?」

突然のほむらの問いかけ。なんでこの状況でそんな質問が出るの
か、疑問に思うもはぐらかしたり、誤魔化したり出来ないと思っ
たから、さっきまでのうろたえてばかりだった秀困気と違い、しっか
りと自分の答えを口にする

「勿論、大切だよ。家族も、友達も、みんな大好きだもん」

「そう、なら忠告しておくわ。この先、何があっても自分を変えよ
うだなんて絶対に思っては駄目。出なければ、あなたの大切なモノ
……全て失うわ」

そう言って、保健室に入っていくほむら。彼女の言葉の意味がな
んなのか? それが判らず、まどかはジッと彼女の入っていった保
健室のドアを見つめているのだった

「ここまでは同じ。多少の違いはあっても概ね、今までと何の変わりも無かった。けれど」

「あっははははは！ ちょ……まどか、何それマジで!？」

「うう、言うんじゃなかった……」

「さやかさん、笑いすぎですわ」

放課後、自分にこの街を案内する。と言ってまどかとさやか、そして二人の親友である志筑仁美と一緒に、街のオープンカフェでこうしてお茶をしているなんて事は無かった。今までは事の元凶を追跡、妨害をしている筈だったのに

「まどかの前に突如、現れたミスティアス転校生。暁美ほむら！しかも夢の中で一度あって……ってか!？ しかも、転校生の方も一度会った事ある様なそぶりだったと！二人はアレだ、前世か何かで結ばれた仲だったんだ……これぞ、宇宙の神秘」

「ほむらでいいわ……」

と言うより、一応、そちらからすれば初見の人間に対してよくもまあ、そこまでズケズケと言えるのだろうか。そんなさやかの神経に逆に関心する

「あ、ごめんなさい。お先に失礼しますわ」

「今日も習い事？」

「ええ、それでは」

そう言つて、立ち上がると軽く会釈し仁美は立ち去つて行き、それをきつかけに自分達もオープンカフェを後にする。その帰り、さやかの用事でCDショップに立ち寄る事になつた。今までに無かつた展開、ここまで大きく大局が変わつた事なんて無いからハッキリ言つてこの後の展開が全く読めない。

「えっ？ 何、誰？」

「まどか？」

ほむらが、今まで感じた事の無い先が見えない不安に頭を悩ましていて、突然まどかが辺りを見渡し始め、やがてCDショップを後にした。さやかとほむらも勿論、まどかを追いかける。そこに浮かぶのは一つの疑問

（おかしい……ここでは私は“アイツ”を殺す為に動いていないのに、なのに何故、まどかと呼ぶの？）

今までは自分が奴を殺そうと動き、それを利用し奴はまどかを呼んでいた。そうして、自分達の世界にまどかを引き込もうとする、それが今までの展開だつた。けれど今回はそれは起りえない筈なのに。ほむらがそう考えながらも走っているとやがて近くの改装中の工場の中に入る。と、同時に周りの空間が歪み始める。二人にとつては奇妙な、ほむらにとっては見慣れた空間に、それと同時に理解する

（私が動いても動かなくてもまどかと呼ぶ事に変わりは無かつた訳ね……）

自分を危機に晒す事で、まどかを呼ぶ。そのやり口はどうやら同じだったらしい。ただ、その危機が自分か、もしくははこの空間に居る“敵”によるものかの違いなだけだ。ほむらの中で疑問が氷解すると同時にようやくまどかに追いついた。その胸に傷ついた一匹の生物を抱きしめて

「まどか大丈夫！？　って、その犬は何？　ってか、犬？」

「判らない、でも見つけた時には怪我をしてて……」

そいつから離れて！　と、ほむらは叫ぼうとするが、状況がそれを許さなかった。突然、自分達の前に毛玉にカイゼル髭を生やした数匹の“何か”が現れる

「な、何これ！！　冗談でしょ！？」

突然の未知との遭遇に、戸惑いと恐怖を表す二人。そんな中、ほむらだけは冷静に思考を働かせる

(自身を危機に晒し、二人を巻き込んで契約を迫る、か。相変わらずやり方が汚いわね、けれど　)

残念ながら、そのやり方は成り立たない。何せ、二人だけじゃない。自分が居るのだから

(こいつも助ける事になるのは癪だけれど……)

それでも、奴の思い通りにさせる訳にはいかない。そう判断し“変身”しようとした矢先

「やれやれ、未確認の魔力反応を追っかけてきてみれば居たのは鬼でも蛇でもなく、アンノウンか。これはいよいよロストロギア絡みの線が濃厚だな」

今までは展開が違っていた。そして今度は、今まで居なかった少年が姿を現すのだった

プログラグsideM - 2 『幾度目の始まり、変わり始めた大局』 (後書き)

まどかサイドのプログラグはこれにて終了。なのはサイドのプログラグを経て本編に入ります

プロローグ side R 『大規模合同調査発令』

ここは、次元世界ミッドチルダ、時空管理局と呼ばれる組織に所属する魔導師と呼ばれる者達が住まう世界。魔導師達は日々任務に挑む。質量兵器の根絶、そしてロストログアと呼ばれし人智を超える存在を規制する。この世界の、そして数多の時空世界の治安の為に

「全く……あんだけの数、一体何処で作ったんだ？」

『判りません。ですが、少なくとも彼らの技術や財力だけでは作れない事は確かです』

新暦70年の月の光だけが届く夜。ミッドチルダの外れに位置する工場跡地にて一人の少年が居た。年齢は14歳ぐらいた。黒のワイシャツにジーパン、そしてその上に丈が胸の少し下辺りまでしか無い、フード付きの白ジャケットに腰から足元にかけては後ろから横を覆う様にジャケットと同じ色と材質のスカートの様な飾り布が巻かれそれをベルトで止めベルトにはポーチが付いた服装をしている左手には黒いフィンガースのグローブを着け、それに隠れて見えないが手の甲の部分にはミッド式魔方陣の青い紋章が浮かんでいる。髪は黒いロングヘア、それを根元で結って下ろし、黒い目に眼鏡を掛けた少年だ。その少年が、飛んでくる銃弾の嵐を壁に隠れながらやり過ごしながらそんな事を呟くと、少年が手に持っている一丁の弦の付いていないボウガンの本体部分の青いクリスタルが点滅し、機械音声の様な声が彼の呟きに返答した

「となると、どっかの企業が裏で生産して付近の暴力団や、ヤクザを通じて密売してる、ってところか？」

『確証はありませんがその可能性が高いと思われます。ですが今は』

「わーってるよ、サジタリウス。そうした調査は他に任せて今は連中を何とかするのが先、だろ？」

やがて、そこで銃弾が止むと同時に「よしっ！」っと気合を入れなおして壁から飛び出したのだった

「昨晚の任務はご苦労だったな」

それから一夜あけ、少年は自分の所属する部隊である108部隊の隊長、ゲンヤ・ナカジマからの呼び出しで部屋を訪ねていた。彼からの労いの言葉に敬礼しながら「ありがとうございます」と返すとゲンヤは机の前に報告書を置く

「取調べは今も継続中だが、今時点で聞き出せた話では兵器を量産してるのは連中じゃないらしい。定期的にグループのリーダーが何処からか大量に持ってくるらしくてな、何処から仕入れてんのかは、連中にも判らんそうだ。そしてリーダーの所在も不明、目下捜索中って所だ。こりゃ、この報告書の通りどっかの企業が一枚噛んでそんな雰囲気だな」

「やはり、ですか」

と、そこでゲンヤは報告書を仕舞うと

「と、まあこの話はこれぐらいにしてお前さんの今後のスケジュールだが」

スケジュール？任務じゃなくてか？ゲンヤの少し変わった言い方に少年が首を少し傾げると

「明日から2日ほど休暇を取って体を休めろ。その間デバイスの方もオーバーホールに出しとけ」

「休暇？ この時期に、ですか？」

てっきり自分もこの事件の裏にいる企業の捜査に加わるものだとばかり考えていた彼は思わず尋ね返すと、ゲンヤはさっきの報告書とは別の資料を取り出し、彼に見せる

「第43管理外世界、ここはお前さんたちの故郷である第97管理外世界と非常に酷似している。地球も存在するし日本も勿論存在する。まあ、詳しい地名とかは変わってはいるがな。他に違うところと言えばこの世界の住人はほぼ全員がリンカーコアを有している。が、それにも関わらず魔法技術は一切発達していない。管理局の上層部でもこの世界を管理世界にし、魔法技術を伝えるか否かで未だ議論をしている」

まあ、確かにこの世界の住人に魔法の技術を伝えればそれだけで管理局の魔導師の人員を増強する事もできる。が、異世界の技術を伝えその世界の歴史に干渉する事も余り、良いものではない

「で、ここからが本題だがついこの間この世界の地球で未確認の魔力反応を感知した。いや、それどころじゃねえ」

そこでゲンヤは一旦、言葉を切る。そしてため息を吐くとゆっくりと口を開き

「地球全体を、巨大な魔力反応が覆い尽くしてる、ってのが正しい状況だ」

「なっ!?!」

魔力反応を見つけた。と言うならまだ判る。大方、誰かが不正にデバイスや魔法の技術を伝えようとしているだけなのだから。

「魔法技術が全く発達していない世界で、星を丸ごと覆い隠す程の魔力反応……はつきり言って異常以外のなにもんでもない、十中八九ロストロギアが絡んでると見て間違いないだろう。一体、地球で何が起きているのか皆目検討もつかん。そこで上層部はある決定を下した」

ゲンヤは更に数枚の資料を彼に渡し。複雑な表情でこう告げる

「陸と海、それぞれから優秀な魔導師を選出し、合同での大規模捜査を行うらしい」

「陸と海の、大規合同模調査……ですか」

その言葉に彼の表情も曇る。それもその筈、時空管理局と言う組織は決して一枚岩ではない。地上本部と本局、すなわち陸と海の間

に大きな確執がある。むしろあのレジアス・ゲイズ中將がそれを認めた事が驚きだ。つまり、今回の件はそれだけ大事、と言う事なのだろう

「ですが、なぜその話をお……自分に？」

「無論、休暇が終了すると同時にお前さんにもこの調査に参加してもらいたいからに決まってるだろう」

「自分が、ですか？　ですがナカジマ三佐、お言葉ですが自分はそんなに」

「謙遜も程ほどにしないと嫌味にとられるぞ。確かにあの三人は去年や一昨年の段階でSランクを取得するほどの奴らだがお前さんだってその年でAAAランク、この任務に参加するだけの資質は十分にある。むしろ、こう言うデカイ任務を経験したっていい頃だ」

ゲンヤの言葉に少年は黙り込み、しばらく考える

「判りました。その任務拝命します」

彼がそう言うとゲンヤは満足そうに頷くと、急に態度を柔らかくし

「まあ、そんなに固くならんでもいい。お前さんの所属する第17班はお前さんにとっては気心の知れた連中が集まってるからな」

そう言って、ゲンヤは宙にディスプレイを出現させて17班のメンバー一覧を映し出す。そこに映っていたのは高町なのはを始めとした自分の親友達の姿

「さて、それじゃ任務の概要を説明する。今回の任務は現地に降り立ち、地球を覆う魔力反応の調査が主な目的だ。そして原因を究明し、それを排除。魔力反応の消失を持って任務を完了とする」

「了解しました。陸戦魔導師、くろぎたくと枢木拓斗二等陸尉。先達の足手まといにならぬ様尽力を尽くし任務に当たります」

プロローグ side R - 2 『調査開始』

時空航行艦アースラ。自分達にとって馴染みの深いこの船が今回の任務で拠点となっているのも、何かの縁、では無くてアースラの艦長である彼の計らいなのだろう。自分達が担当する区域に向かう中、拓斗はこの船の艦長から現状説明を受けていた

「調査開始と同時に、まず各艦でスキャンを行った結果、件の魔力反応とはまた別の、不特定の魔力反応が幾つかの場所で検知された。とりあえずはこの魔力反応がなんなのか、そこから調査に入ってもらうと言うのが当面の方針だ。ここまでで何か質問は？」

クロノ・ハラオウン提督、拓斗の親友の一人であるフェイト・T・ハラオウンの義兄であり、母、リンディの後を継ぎ、アースラの艦長となり更にはエイミイと言う婚約者まで居ると言う、公私共にリア充全開な人生を送っている。ちなみに今、アースラにはクロノや船のスタッフの他は拓斗一人しか居ない。なのはを始めとした他のメンバーは各々の仕事の処理や引継ぎが終わり次第、順次合流となっている。

「不特定の魔力反応の正体とコンタクトを取った後の行動は、こちらの判断でいいのでしょうか？」

「一応は、な。それと拓斗からなのはに伝言を一つ預かっている。

「自分達が合流するまで無茶はしないでね」だそうだ」

「……可能な限り善処する。って伝えておいてください」

「フツ、判った。伝えておこう」

「艦長、調査区域に到着しました」

「了解した。さて、ここが今回、僕達が調査する区域、見滝原市だ。魔力反応の出現頻度が他の区域より比べ多い。警戒は十分しておいてくれ」

「了解、っと」

「どうだ、サジタリウス？」

『不特定魔力反応無し、現地人のリンカーコアの反応のみです』

それから数分、拓斗は見滝原市に降り立ち調査を開始していた。今の拓斗の格好は管理局の制服ではなく、ジーパンに白のパーカーと一般的な格好、何時もの黒いグローブは変わらず、首には青い宝石の付いた金属製のネックレス、待機状態のサジタリウスが掛けられていた

「流石に、そう簡単にはいかないか。しかし……」

そこで言葉を切り、辺りを見渡し始め

「本当に、みんなリンカーコアを所有しているんだな。だと言うのに魔法の存在は絵空事。そりゃ上層部も揉めるわな」

魔法や異世界は実在する、そんな事が知られれば世界的大事件に繋がる。上層部が判断に苦しむのも理解できた。と、自分の世界の日本円が使えたので途中の自販機でジュースを買いながらとりあえずブラブラ歩いていると近くのCDショップから一人の少女が走りながら飛び出してきて、その後に続き更に二人の少女も同じ様に飛び出してきた。特に変わった光景でも無いのでそのまま通り過ぎようとした時

『マスター』

「どうした？」

『魔力反応を検知、現在移動中』

デバイスからの報告を聞くと同時に拓斗は飲み終わった缶を近くのゴミ箱に投げ入れ

「トレースできるか？」

『現在トレース中。サーチャーを飛ばしてみますか？』

「いや、このまま直接追跡だ。案内頼む」

『了解しました』

「時に、魔力反応の正体の方は不明なまま、か？」

『いえ、先ほど店から出てきた二人の少女、その片方から魔力反応を検知』

「あの二人、か。オイオイ、まさか今回の相手は人間様、なんてオチはカンベン願いたいんだがな」

追跡の途中、拓斗がふと思った疑問を口にし、サジタリウスから返ってきた答えを聞き軽くげんなりしていた。魔力反応の正体が入、そしてこの住民は皆リンカーコア持ち。そうなると誰が関係者であつても可笑しくない。更に

『マスター、げんなりしてる所スイマセンが更に悪い報告です。魔力反応突然ロストしました』

「報告ありがとさん……こいつは、予想以上に難航しそうだな……」

とりあえず、魔力反応が最後にロストした地点に来てみればそこは改装中の工場。とりあえず、工場に入ろうと手を伸ばそうとしたがその手を途中で止めた

「サジタリウス……」

『はい、当区域に結界を確認、魔力反応から認識障害と空間歪曲の併発型と推測されます』

「術式は？」

『ミッド式、近代及び古代ベルカ式、いずれも該当せず。未知の術式です』

「と、なると解除は不可能……か。ならば力押し、だな」

そう言つて、一旦入り口の前から離れると首にかけたサジタリウスに手を掛け、ふと思ひ出した様に周りの人気を確認すべく周囲を見渡す。やがて誰も居ないのを確認すると

「第一拘束機関解放！ セットアップ！」

グローブの手の甲の部分に一瞬だけ青い紋章が浮かんだかと思うと次の瞬間には拓斗の服装が私服からバリアジャケットに変わり、手には発動状態のサジタリウスが握られていた

「サジタリウス、フォームチェンジ」

『bow form』

それと同時にボウガンだったサジタリウスの形状が大弓に変化する。弦に指をかけ引くと同時に拓斗の魔力が一本の矢を形成し、矢の先端にミッド式の魔法陣が展開される

『Arbalest fang』

そして矢が射られ魔方陣を通り抜けると同時に矢がまるで流れ星の様に魔力を帯びて飛び、何も無いはずの空間に刺さり、しばらくバチバチと激しく漏電した様な状態になっていたが、やがて空間が

砕け、中には工場とは似ても似つかない空間が広がっている

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……」

サジタリウスをボウガンに戻し、不敵な笑みを浮かべつつ呟くと同時に拓斗は空間内に進入する。そして

「やれやれ、未確認の魔力反応を追っかけてきてみれば居たのは鬼でも蛇でもなく、アンノウンか。これはいよいよロストログア絡みの線が濃厚だな」

しばらく、歩かない内に未確認生命体に何か犬っぽい奴と一緒にいる三人の少女を発見するのだった。魔導師と魔法少女、本来は交わるはずも無い二つの物語が、いま交わり始める

第一話『ファーストコンタクト』

「あなた、何者？」

「何者かと聞かれれば今の所は……企業秘密。そんでもって君達と敵対するつもりも今の所は無いつて感じたな」

「ふざけてないで質問に答えて！」

ほむらが突然現れた少年、拓斗に対し声を荒げて訊ねるも拓斗は涼しい顔でそれを流す。その態度に怒りを露にしだしたほむらを拓斗は手で制すると

「まあまあ、そう怒りなさんな。とりあえずまずはあちらさんをどうにかしようぜ。それともあのアンノウン、お友達なのかい？」

「あんな気色の悪いお友達はゴメンよ」

「だよな、俺もゴメンだ　　っと」

突然、アンノウンが拓斗に対し突進を仕掛けてきたのを拓斗はバツクステップで回避すると同時にサジタリウスの矢を射る。放たれた魔力の矢はアンノウンを貫通、そのまま相手は弾け飛び消滅した

「加えてあちらも殺る気マンマンってところだし、お話はあれを殲滅してからって事で。オーケー？」

サジタリウスを構えながら問いかけるとほむらはそれに対し溜息を吐いて、宝石の様な何かを手に持ち

「後で全部聞かせてもらおうよ」

そして宝石が輝き、それが収まるとほむらの服装は一変。セーラー服にも似ているが何処か違った服装をしており、腕には小型の盾、バックラーが装備されている

「……そっちな」

一瞬、デバイスなのかと思い、サジタリウスに目を向けるが自分のデバイスからは答えは返ってこない。つまり、デバイス反応では無い未知の反応にサジタリウスも困惑気味って所だろう。ほむらが自分の盾からハンドガンを取り出し、アンノウンに向けて引き金を引くと同時に拓斗はそう呟いて戦闘を再開した。そして、その後ろで状況が何一つ掴めず混乱している二人がいた

「何！？ 何なのよアイツ！！ てか転校生、その格好、と言うかコスプレ、それにその銃もしかして本物じゃ！？」

「お、落ち着いて！ さやかちゃん」

その時だった。困惑している二人の背後からさっきの同じアンノウンが数匹、近づいてきたのは

「ちょ、ちょっと冗談でしょ！？ こ、こっち来るなあ……」

「っ！？ しまった！」

そしてその事にほむらの方が先に気づき、自身の能力を発動させるべく盾に手を掻ける。が、次の瞬間、何処からか伸びてきた黄色

いりボンがアンノウンを絡めとり、続けて銃声と共にまどか達の傍にいたアンノウンが弾け飛ぶ

(これは……?)

「あなた達、危ない所だったわね。でも……もう大丈夫よ！」

そこに居たのはほむらが予想した通りの人物。自分と似た服装。けれど、こちらは黄色の茶色、白を基調としており、頭には羽毛の飾りと中心に黄色の宝石をあしらった花を模した飾りがついた帽子を被り、その手にマスケット銃を持った少女の姿が

「……どちら様？」

「自己紹介は後で。とりあえずまずは」

突然の登場にまどか、ワンテンポ遅れて訊ねるとその少女は二人の傍に立ち、拓斗とほむらが交戦している方の集団に目を向ける

「使い魔共を片付けないとね！」

そう言っつて、自分の手を横に払った瞬間、彼女の周りに大量のマスケット銃が姿を現して

「そのこの二人。今すぐそこから離れて！」

そして拓斗とほむらに指示を飛ばした。ほむらはすぐさま、そしてそれから少し遅れて拓斗もそこから飛び退くと同時に、全てのマスケット銃の引き金が引かれ、放たれた銃弾の嵐は瞬間に全てのアンノウンを駆逐していき、静寂が戻る頃にはアンノウンの姿は消え

ていた。そしてそれから数秒程すると同時に空間が不安定に波打ったかと思うと次第に元の、工場内部の空間に戻っていた

「これでよし！」

「ありがとう。マミ、おかげで助かったよ」

「じゃ、喋った!？」

少女の手から暖かな光が溢れ、それを自分の膝の上に乗せていた謎の生物に翳すと傷はみるみる癒えていき、完全に傷が塞がるとその動物は軽く首を振った後に少女、マミに礼を述べ、動物が喋った事にさやかが驚きの声を出す

「お礼ならこの子達に言って。私じゃ間に合わなかったかも知れないから」

「うん、ありがとう！ まどか！ さやか！」

「何で私たちの名前知ってるの!？」

「私からもお礼を言わせて、この子は私の友達なの。助けてくれてありがとう」

「え、ええ……別に、気にしなくていいわ」

「成り行き上、そうだったただけだしな」

笑顔でお礼を言うマミに対し拓斗は肩を軽く竦めながら、ほむらは何処か歯切れが悪そうにそれぞれ言葉を返す

「それにしても……」

マミは突然、拓斗の方をしげしげと見つめ拓斗は何事かと首を傾げていると

「あなた……もしかして男装女子？」

次のマミの一言で思わず「はあ!？」と声を荒げる

「おいおい、何処をどう見たら俺が女に見えるんだよ？」

「そ、そうよね、ごめんなさい。でもキュウベイが男と契約した。なんて話、聞いた事無いから」

「そりゃあね。僕と契約出来るのは女の子だけだし、僕も男と契約した記憶は無いよ」

「だったら、さっきの魔法は？」

と、胸に抱いているキュウベイと呼ばれる生物に訊ねると拓斗は窓の外に目を向けると

「その話はよ。とりあえず落ち着いた場所ではないか？」

拓斗の言つとおり、外はすっかり日が暮れており窓から差し込む月の光が互いの姿を映し出している。そしてマミの方も「それもそうね」と納得し立ち上がると

「なら、自己紹介だけでもしておこうかしら」

そう言つと、マミの服装がまどか達の着ている制服と同じ服装に変わり「

「私はバマミ、あなた達と同じ見滝原中学の3年生よ。そしてこの子が」

キュウベイと呼ばれる生物がマミの手から離れ、地面に着地し

「僕はキュウベイ。まどか、さやか、君達にお願いがあるんだ」

そして、自分が幾度となく色々な少女に向けて言った一言を言う

「僕と契約して魔法少女になつてよ」

第二話『魔法少女と魔導師』

「ろくにおもてなしの準備もしていないけれどゆっくりしていったら……ねえ。これで準備が出来てないってなら準備万端の時のおもてなしはどれだけのものなんだか」

本人はそう言っているが、紅茶にケーキとおもてなしとしては十分、拓斗が紅茶を口にして「おっ、うまいな」と思わず口にした。あれから5人はマンションのマミの部屋を訪れており、そして紅茶とケーキで一息ついてから話の本題に入る

「きゅうべい選ばれた以上、他人事ではないものね。魔法少女の事を説明しておくわ。暁美さんもいいわよね？」

「……ええ、あなた達は知る必要がある、魔法少女の事」

ほむらもティーカップをテーブルに置いてキュウベイを一瞥後まどか達の方に目を戻す。そしてマミは自分の首に下げていた宝石を三人に見せる。ほむらのが紫色ならばこちらは黄色をしている

「これはソウルジェム、魔法少女の魔力の源よキュウベイに選ばれた女の子が契約をした時に生み出す宝石なの」

「そう。僕と契約した魔法少女は“魔女”と戦う使命を負う事になるんだ。その代わり、どんな願い事でも一つだけ、僕が叶えてあげられるんだ」

「何でもって、金銀財宝、不老不死に、あんな事も！」

「あんな事……?」

「気にはなるが、なんとなく触れちゃいけない気がするな」

願いが叶う。その事に思わず机に手を置き、身を乗り出すさやか。が、すぐにその勢いは無くなると

「あ、でもその戦わなくちゃいけない魔女って?」

「私たち魔法少女が希望をもたらず存在ならば、魔女は逆に絶望を振りまく存在。最近、起きている原因不明な自殺や殺人事件は高い確率で魔女が原因なの。そして魔女は常に結界と呼ばれる所に姿を隠している」

「あなたがさつき居た所よ」とマミが説明を続けていると今まで黙っていたほむらが急に口を開き

「結界はその中に居る魔女や使い魔を倒さなければ解ける事は無い。つまり、普通の人間が一度結界に迷い込んだら二度と生きて出られないと思いなさい」

ほむらの言葉に二人が顔を青くし身震いをする。そりやそうだ、普通の中学生の自分にあんな化け物を倒せる筈が無い。つまり、マミやほむら、拓斗の3人が居なかったら二人は即お陀仏だったのだから。そこで、今度は拓斗が手を挙げて

「ってことはさつきの不気味空間が結界である髭の化けもんが魔女って奴か?」

「いいえ、あれは使い魔の方で魔女が生み出す魔物の事。けれど、使い魔も人間を何人が食べれば魔女に進化するから、放って置くことは出来ないわ」

「そ、そんな怖いものと戦っているんですか？」

「ええ、命がけよ。だからあなた達も契約するかどうかは慎重に考えて決めた方がいいわ」

「私としては契約なんてしない方がいいわ。たった一つの願いの為にそれからの人生、死ぬまでずっと魔女と戦い続けなければならぬのだから……」

「あの……もしかして、ほむらちゃんも？」

最後にほむらがそう言うって説明を終えて、ほむらは目を伏せたまま再び紅茶に口をつける。そんなほむらの様子を見ていたまどかだったが、恐る恐る訊ねるとほむらはまどかの方に目を向けると自分のソウルジェムを取り出し

「その通りよ。私も同じ魔法少女、けれど今はなってしまった事を後悔しているわ」

それは嘘だった、手放しでは喜べない事だらけだが少なくとも自分はこの力のおかげで自分の目的を果たす為に動く事ができるのだから。ただ、魔法少女なんてそんな良いものじゃない。二人にはそう思っただけだった

「それに魔法少女は魔女を倒す正義の味方、なんて思っているのならその考えは捨てなさい。魔法少女は魔女だけでなく同じ魔法少女

とも争いあつただから」

「えっ！ 違うの？」

どうやら、完全に魔法少女は正義のヒーローという思考が出来上がっていたらしく、思わずさやかが口にして訊ねると

「まあ、暁美さんの言い方は極端ではあるけれど嘘ではないわ。魔女を倒すとある見返りがあってそれを奪い合って争う魔法少女も確かに存在しているし、実際そっちの方が多いのよ」

そして、ママがケーキの最後の一口を食べ終わると同時に「魔法少女に関してはこんな所ね」と説明をみるとその目をケーキを手づかみで食べている拓斗に向けて

「それじゃ次は枢木さんの番ね。あなたは一体何者なの？」

そう訊ねると、拓斗は残っていたケーキを口の中に放り込み、口元についていたクリームを親指で拭くと

「そんじゃ、次は俺の番か。とりあえず結論から言えば、俺は異世界から来た人間だ」

「「「……は？」」」

「予想通りの反応ありがとう……だが事実だ。それを踏まえた上で聞いて欲しい」

魔導師の事や時空管理局の事を伏せるべきか悩んだが、今回の件に魔女と魔法少女が関わっているのはまず間違いないだろう。ならば

ここは下手に隠さず話せる範囲で話し、きちんと信頼関係を築くべきと判断。同時にもし時空犯罪者なら管理局の名を聞き、何らかのリアクションがあるかもしれないと、とりあえず異世界の事を告げると三人はポカーンとし、ほむらもジト目でこちらを見ている

「俺は時空管理局って呼ばれる組織の一員で、管理局は全次元世界、つまりあらゆる世界の治安を守る事を目的とした組織なんだ」

「拓斗さんはその年でその……時空管理局って言う組織に勤めているんですか？」

自分と一つしか変わらない筈なのに、そんな大きな組織で働いている。その事にまどかが思わず訊ねる

「ああ。まあ、これはあんまり関係ない話だろうからサラッと流す事にして。その管理局では魔導師と呼ばれる人間がいる。俺もその一人だ」

「魔導師……？」

「そつ。魔導師は体内に大気中の魔力を蓄積させる特殊な器官、リソナーコアを有していて、その魔力を使い、デバイスと呼ばれる魔法記録媒体を使って魔法を使うんだ」

そう言って、自分の首に下げたサジタリウスを四人に見せる

「今は待機状態にしてあるからネックレス状だけど、こいつを発動状態に切り替えれば」

そしてそのまま、バリアジャケットは着装せずにサジタリウスを

発動状態にする

「この通り、杖や剣と言った何らかの形状を取るって訳。サジタリウス、自己紹介」

『初めまして、ミッド式対応インテリジェントデバイス、サジタリウスと申します』

「うおっ、ボウガンが喋った!？」

「デバイスにも幾つか種類があつてな。俺のサジタリウスの様にAIがついてるタイプもあるんだ」

見事に予想通りの反応を示すさやかに拓斗はしてやったりな笑みを浮かべて説明を続けた

「随分とSFチックなのね、魔導師と言うのは」

「まあ、君達が思ってる様なファンタジーな魔法とは一線をきしたものかもな」

拓斗からサジタリウスを借りてそれをしげしげと眺めながらマミは思った感想を口にし、拓斗もそれに同意を示す

「魔導師……ね。つまり枢木拓斗、あなたがここに居るのもその管理局の任務によるものなのかしら？」

「まあな。おっと、詳しい内容までは今んとこ企業秘密だ。ただ、その任務に魔女が絡んでいる線が濃厚なんだよな。まあ、俺の身の上なんかどうでもいいだろ？ それよりも問題は……」

拓斗はまどかとさやか二人に視線を向けると

「君達二人はどうするか、だ。なるのか？ 魔法少女に」

拓斗の質問に二人は何も言う事が出来ない。願いが叶うのは確かに魅力的だ。けれども、その為にあんな化け物と戦い続けなければいけない。それが二人を悩ませる。するとマミは二人にある提案を持ちかけた。その内容は

「そうだわ。だったら二人とも、暫く私の魔女退治に付き合ってみない？」

「「ええっ!？」」

「なるほどな、言葉じゃ判らんから実際にその目で見てみるって訳か」

「そう言う事。いわば魔法少女体験ツアーって奴ね」

「私はお勧めできないわね。なんの力も無い人を魔女の結界の中に連れて行くなんて」

まあ、常識的に考えればそうだろう。二人を守りつつ、尚且つ敵も倒さなければいけない。それを一人でやるのはソロで戦うより困難を極める。それを提案したマミにやめさせる様反对意見を出したほむらだったが次のマミの一言に呆気に取られることになった

「あら、3人も居れば余程危険な魔女で無い限りは対処できるとは思うけれど……」

「3、人……?」

「ええ、私と枢木さんと暁美さんの3人よ」

「私も数に含まれていたの?」

「当たり前じゃない、さつき魔法少女は争いあう者と言ったけれど協力できるなら協力するに越した事はないわ。勿論、見返りの方は山分けよ。それとも、誰かと分け合うのは嫌だったかしら?」

ほむらは最初こそ呆気にとられていたがママの提案は自分にとってはとても好都合だ。故にすぐさま了承の意を示す。

「いえ、そんな事はないわ。判ったわ、魔法少女体験ツアー、参加させてもらうわ」

「俺の方も問題はねえよ。正直、その魔女の結界。俺じゃ近くまで来ないと見つけれなくてな。専門家と一緒に行動できるなら願ったりって所だ」

「なら、決まりね!」

こうして、チームを組む事になった三人。魔導師と魔法少女、魔法を使い戦う者達の物語は本格的に動き始める

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1929z/>

魔導戦記リリカルなのはStrikerS <交わりし、魔法と魔導の軌跡>

2011年12月30日00時51分発行